

## 2023 年度 豊田市矢作川研究所シンポジウム記録 市民連携で進める川づくり

本稿は、下記のとおり開催した豊田市矢作川研究所シンポジウムの記録である。紙面の都合により発言の内容は本誌編集委員会の責任においてその主旨を損なわないよう配慮し簡略にした。

### 2023 年度 豊田市矢作川研究所シンポジウム 「市民連携で進める川づくり」

- ◆日時 2024 年 2 月 10 日（土）14 時 00 分～17 時 00 分
- ◆会場 井郷交流館 大会議室
- ◆基調講演 「市民主導の川づくりで創出する魅力ある水辺空間」  
坂本 貴啓（金沢大学人間社会研究域地域創造学系）
- ◆研究報告 「遊べる川がもたらすもの  
—子どもと保護者へのアンケート結果から—」  
山本 大輔（豊田市矢作川研究所）
- ◆意見交換 「市民連携で進める川づくり」  
パネリスト 坂本 貴啓（金沢大学）  
小野内康伊（岩本川創遊会）  
須藤 友章（豊田市役所河川課）  
コーディネーター 山本 大輔（豊田市矢作川研究所）

## ■開会

○司会（小野田） これより 2023 年度の豊田市矢作川研究所シンポジウムを始めます。本日司会を務めます矢作川研究所の小野田幸生です。どうぞよろしくお願ひします。

本日のシンポジウムですけれど、あちらのほうに貼られていますように、「市民連携で進める川づくり」がテーマです。河川管理への市民の方の関わりや他の河川での事例について学びまして、理解を深めることによって河川環境の保全のいろいろな活動が活性化することを目的として開催致します。それでは、最初に、主催者を代表しまして豊田市矢作川研究所所長宮田昌和より、開会の挨拶を申し上げます。

○宮田 改めまして、皆さん、こんにちは。矢作川研究所の宮田と申します。どうぞよろしくお願ひ致します。本日は、お休みの中、また、皆さんお忙しい中、このようにたくさんの方に矢作川研究所シンポジウムに参加して頂きまして、誠にありがとうございます。

日頃は豊田市の河川行政並びに矢作川研究所の活動につきましてご協力・ご支援頂きまして、重ねてお礼申し上げます。ありがとうございます。まず、元日、能登半島地震におきまして甚大な被害が発生しました。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りしますとともに、被災された方々のお見舞いを申し上げたいと思います。豊田市としても、消防、それから上下水道局、看護師などの様々な分野から被災地のほうへ支援に行っているところでございます。

さて、矢作川研究所は、矢作川をはじめとする市内の河川、水辺の生態系、自然や川の文化というものを調査研究しまして、その成果を広く広報しているところでございます。「矢作川研究」という所報、それから、皆様にお配りさせて頂いております季刊誌の **Rio**、それから、ホームページ等でそれぞれ情報発信をさせて頂いているところでございます。

このシンポジウムも広報活動の一環として、研究所設立以来、平成 30 年度まで毎年開催してまいりましたが、新型コロナウイルスの関係で、今回は 5 年ぶりの開催となります。市民の皆様研究所の成果、それから、川の情報発信させて頂きまして、それを共有して、皆様と一緒にこれからの川づくり、また、地域づくりに役立てて頂きたいと、そのような思いで活動を進めております。

本日は、国会でお忙しい中、八木環境副大臣にもお越

し頂いております。ありがとうございます。それから、シンポジウムの開催にあたりましては、国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所様、愛知県様、矢作川水系八漁協連絡協議会様にご後援を頂いております。重ねてお礼申し上げます。

今日のシンポジウムの内容でございますが、先ほど司会からもありましたように、ざっくりと申しまして、市民の皆様と川を管理する、河川管理する行政と上手に連携して、よりよい川づくりを行っていかうと、そういった内容となっております。日頃、川の活動をされている皆様にとって、いいヒントになればありがたいなと思っております。基調講演を金沢大学の坂本先生にお願いしております。先生が関わられた全国の川づくりとか、魅力ある水辺空間づくり、そういったことの取組について、お話を頂きたいと思ひます。冒頭で申しましたように、先生は金沢にお住まいでございまして、地震の影響で大丈夫かと思ひたのですが、駆けつけて頂きまして、ありがとうございます。それからディスカッションには、研究所と市民が共働で進めております「ふるさとの川づくり」という事業がございまして、その中で、地域で活動して頂いております岩本川創遊会の小野内様にもお越し頂いております。ありがとうございます。よろしくお願ひします。

豊田市では、矢作川をはじめとして、市内の河川や水辺の地域住民の方々、市民の方々の関心というのは非常に高く、地元の川辺を良くしようということで、河畔林の整備には草刈りなどを日常的に行って頂いております水辺愛護会というのが今市内に 25 団体もあります。そのほか、今申しましたように、ふるさとの川づくりも研究所と一緒に活動して頂いているということもありますし、市内一斉の環境美化活動で川や水路の草刈り等にご熱心に活動して頂いているところでございます。誠にありがとうございます。今後も皆様方の活動によって矢作川や地域の河川に触れ合っ、自然環境を良くする、景観を保全されて、次世代の子どもたちに引き継がれていくというようなことを期待しているところでございます。

最後に、研究所は平成 6 年に発足しまして、設立当初から地域に根差した研究所ということで、水辺愛護会活動、矢作川の天然アユの調査、外来生物の対策、流域の森林の調査、そういった様々な調査活動を市民の皆様と一緒にしてまいりました。それを研究所の強みとして、地域に根差して、現場でその課題解決に努めてきたところでございます。

そして、今年創立 30 周年を迎えるということで、これからも今後の活動を、今までのことをしっかりと振り返りながら、さらに市民の皆様、それから関係機関の皆様のお役に立てますよう頑張ってまいります。研究所の活動にこれからも皆様方の引き続きのご支援をお願いしまして、開会の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく申し上げます。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。続きまして、来賓の方からご挨拶を賜りたいと存じます。環境副大臣八木哲也様です。なお、八木様は本日のシンポジウム開催にあたり後援を頂いております矢作川水系八漁協連絡協議会代表も務められておられます。八木様、よろしく申し上げます。

○八木 改めまして、皆さん、こんにちは。ただいまご紹介賜りました環境副大臣の八木でございます。今紹介にもありましたけれど、環境副大臣を仰せつかっておりまして、実は川の環境、生物多様性、そこに繁茂する動植物等々に関しまして私たちのテリトリーでありまして、しっかり皆様と国交省の皆さんも含めて連携してやっていければありがたいなと思っております。そして今日のシンポジウムには、わざわざ坂本先生、金沢からお越し頂いて、地元では大変だと思いますけれど、まげてご出席頂きましたことに改めて感謝申し上げます。

川はみんな名前があるのですよ、一つ一つ。私のところにも川がありますけれど、小さな川も含めてみんな名前がある。みんな名前があるということは個性があるということでありまして、その地域地域でずっと育んできたものがあるわけでありまして、そういうことから水辺愛護会等々ができて、それらを大事にして頂くということはありがたい話でありますけれど、とはいえ、ハードの面、ソフトの面、両面あるわけでありまして、ハードの面は、やはり国交省が今進めております国土強靱化で災害に強い川にしていかなければいけない。しかし、災害に強いからといって環境に優しくなければいけない、また、先ほど言いましたように、それぞれの個性がある川を個性がないような川にしちゃいかん、こういうふうに思っておりますので、そういう面においては、しっかり皆さんと連携しながら、いい川をつくってほしいなと思うのです。

私の近くにも水間川というのがありますけれど、これは市木川を源流にしておりますが、矢作川に流れる川で

あります。実は去年、うちの孫と近くの子どもを連れて 8 人でその水間川へ行ってポンツクをしました。そんなにたくさん獲れたわけではありませんけれど、今の子どもはタモも使うことができない。ただ上からたたけばそこの中に入るくらいの感覚でありまして、おじいさんが草の茂みのところにタモを置いて川上からジャバジャバジャバとやると 2, 3 匹入る。もうおじいさんは英雄でありまして、そういう体験も子どもにとっては大事な体験ではないのかな、こんな思いがしておりますので、そういうことも併せてこれからも丁寧にいそしんで頂ければありがたいなと思っております。環境省と致しまして、しっかりそういうところにも手を差し伸べていきたいと思っております。

今、石川のほうで大きな災害がありました。環境省と致しても人材を今派遣してはおりますけれど、特に環境省がやっている仕事としましては、し尿処理、下水処理等々の問題、これは直近の生活に関わる問題であります。これから災害廃棄物の分別、そして処理、これが環境省が担っていく部分でありまして、まだまだ 2 年 3 年かかるかも分かりませんが、しっかり石川の皆さんに寄り添って頑張っていきたいと思っておりますので、皆さん方におかれまして、そういうお気持ちを持って頂くだけでもありがたいと思っております。

本日のシンポジウム、盛会であることに心から感謝申し上げます。ご挨拶にさせていただきます。本日はおめでとうございます。ありがとうございました。ありがとうございます。

○司会 どうもありがとうございました。

## ■基調講演 市民主導の川づくりで創出する魅力ある水辺空間

○司会 次は基調講演になります。講師は金沢大学人間社会研究地域創造学系講師の坂本貴啓様です。お話し頂きますタイトルは、「市民主導の川づくりで創出する魅力ある水辺空間」です。準備が手間取っているのですが、少し講師の紹介をさせていただきますと、坂本先生は、筑波大学のほうで博士号を取られまして、その後、土木研究所自然共生研究センターのほうで専門研究員をされておりました。そのときに私、同僚でした。その後、東京大学の先生になられて、その後、金沢大学の今の講師の職に就かれております。

実は、なじみがあるからお願いしたというわけではございませんで、実際、土木研究所時代に市民の方の願い

を受ける形で川づくりをされた経験をお持ちです。さらに、「川系男子」というように、自称なのですけれども名乗っておられまして、全国の川を巡っておられます。その中で、この矢作川を初恋の川とちゃんと公言されておりますので、今回のシンポジウムにうってつけの先生だと思っておりました次第です。それでは、よろしくお願ひします。

○坂本 皆さん、こんにちは。改めまして、金沢大学の地域創造学の坂本と申します。本日はありがとうございます。

はじめに、今回の石川県内で発生した能登半島地震のことで、豊田市のほうからも1月2日から能登半島のほうにお越し頂いていろいろな活動を行って頂きましたこと、石川県に住んでいる者として、改めて御礼申し上げたいなと思っております。これから多分、まだ半島ということではなかなかアクセスしにくいところも少しあるのですが、ちょっとずついい方向に進んでいくといいなということで、また、皆さんのお力添えを頂きながら復興も進めていけるといいのかなと思っております。よろしくお願ひ致します。

この写真は私が高校2年生のとき、18年前くらいに撮った写真なのですが、ここの風景がとても好きで、今日も少し古峯水辺公園に行ってきたのですが、ここがとても好きで、初恋の川というように呼んで、なぜ初恋の川なのかということもちょっと今日の内容でご紹介したいなと思っております。

今回のテーマは市民連携ということで、連携をしながらどういったいい川をつくっていけるかということです。まず連携をするためには、やはりその市民の人たちが自分たちでどんなことをしたいのかという、市民主導ということが一つキーワードになるのかなというように思っています。その中でどういう魅力を創出していくのかということで、ちょっとそういった観点で、今日、皆さんにお話をお伝えできればと思っております。よろしくお願ひ致します。

まず、市民主導の川づくりの視点として大きく私として考えてみたのが、一つが川の空間を人に生かすというようなことで、公共空間を民間が活用するというような、そういったことが一つ魅力、市民がやっていくことに意義があるのではないかとこのように考えました。もう一つが、人の力を川に生かすということで、水辺愛護会、もう30年以上活動されてこられている、そういう方々の力を川に生かすということが、どんな魅力ある空間を

創出するののかというようなことも重要だろうということと、あと、矢作川のほうで、もう以前から連携がずっとされていると思いますが、流域で連携をするということの価値というもの、その三つの観点で、川づくりというものを市民の中で進めていくというのが一つキーワードとして考えていければと思っております。

少し簡単に私の紹介をさせていただきます。私、福岡県の北九州市というところに生まれまして、遠賀川という川、石炭産業で栄えた川ですけれど、当時の小学生が川の色を描くと真っ黒で塗ったというくらい、ぜんざい川と言われたような非常に真っ黒だった川という、そういう逸話もありますが、日本の近代化、八幡製鉄所に石炭を運んだ、そういった川のところで育ちました。九州一のどぶ川と言われていたのですが、私はここを毎日、遠賀川の橋を渡って高校に行くというようなことをしていました。

その後、筑波大学のほうに行きまして、筑波大から土木研究所、先ほど小野田さんがおっしゃいましたように、初めて新社会人になったときに私の先輩が小野田さんでして、たくさん怒られましたし、いっぱい教えてもらいながら、共生センターで楽しく仕事をしていました。石川県に東京大学の北陸サテライトというのがありまして、そこに2年ほどに前に赴任しまして、そこで地域連携のことをやっています、今、10月から金沢大学のほうに移ったということになります。

今日、もう皆さんにこれだけはぜひ今日お伝えしたいなと思ったことがあったのですが、初恋の川というふうには、もうずっと私が言っている川なのですが、「水の文化」というお酢のミツカンさんが出している冊子で連載をされていて、矢作川を紹介させてもらう機会があったときに、最初にこんなことを書きました。ちょっとかいつまんで読ませていただきます。

「この川との出会いは遡ること高校3年生の7月(2005年)。坂本少年は水辺館のおばちゃんたちに、『川づくりの全国大会(川の日ワークショップ in 矢作川)が愛知県であるから、高校生たちで発表してきなさい』と送り出された。現地に着いてからは、地元の川で頑張っていることを発表し、夕方からは懇親会に参加。これ、川沿いでやる懇親会がありました。「坂本少年は思わずため息の出る光景を目にした。川岸に生える木々、川に映る夕日、川の中で釣りをする人、川辺に集う全国からの参加者たち。何がいかうまく言い表せないが、ほんとうに美しい。理由なく美しい。ふるさとの川しか知らなかったけど、初めて見た川にこんなにも感動することが

あるのだと、そう思わずにはいられなかった。初めて川に恋するという感覚を知った遠くの川の名前は『矢作川』一]

ということで、私が、ちょうどこの水制工の上に乗って、ちょうど懇親会がこのとき行われていたのですけど、ここでアユ釣りをしている方もいたりとか、河畔林があったりという、高校生ながらに何か直感で本当に美しいなっていうのがうまく言い表せなかったのですけれど、そんな感覚にさせられる場所で、ここが古巣水辺公園という名前すらも知らなかったのですけれど、大学生になってから、またこの場所を探し当てて訪問したということがありました。当時こんなやんちゃな感じで、またここで楽しんでいました。

私、矢作川にその都度その都度、節目節目に結構来るなというのを思い出しまして、まず2005年、愛・地球博の年に、ここに来たのが最初です。数年たって博士課程に上がったときに全国の川巡りを始めたのですけれど、そのときに、昔行った矢作川のあの場所はどこだろうというの、もう近くにこういう木があったとか、それくらいしか手がかりがないのですけれど、地図を見ながら何とかここを探し当てました。デザイン賞とかいろいろなことでも評価もされている現場だったということはこのとき初めて知りました。共生センターに入ってから小野田さんの調査で連れて来てもらって、少しここにも寄り道をさせてもらって、ここでまた記念写真を撮りました。この前、連載をさせてもらっている記事で矢作川取材して紹介するというので、自分の人生の中の結構節目のところまで矢作川を訪れるというのが、今回も含めてあるかなと。

2005年の7月に来て、今日も行ってきました。朝、行ってきたのですけれど、すごくきれいな水制工があって、瀬と流れも多様な流れがあって、本当に気持ちのいいところだなと思いました。矢作川を好きになったその理由は何なのだろうと。直感で好きというのはとてもあるのですけれど、私が今まで好きな川で岡山県のこういう中小河川、これ好きだったな、岐阜県のここも好きだったな、福岡県のこういう川、好きだったなとか、矢作川でいったら巴川のこういうところがすごい好きだなというのを、あるとき、ちょっといろいろな研究者の人とかと話しているときに、「さかもっちゃん、砂河川好きやな」というふうに言われて、私が好きなのは、ちょっと川底が砂々したような、そういうちょっと砂があって、ちょっと白っぽく見えるような、そういうところがちょっと流れたときにキラキラと見えるような、そういうのが実は

好きなんじゃないかなということ、実は砂河川好きなのじゃないかというのが最近分かるようになりました。そういう、何か自分の中でこういった川が好きだということ、川のことをちょっとずつ勉強していく中で、自分の人生の中でちょっと豊かにいられるようになるっていうのは、川をずっとやってきてよかったなと思った瞬間でもありました。

この写真、巴川で調査している小野田さんで背中を語っています。川底の石のアユの食み跡とかを見る調査に私もちょっと補佐的についていって、小野田さんの調査をじっと見ているのですけれど、楽しくなって、半分ちょっと遊びながら、流速計を持った写真を小野田さんに撮ってもらいました。そういうことで、矢作川は共生センター時代にも訪れる機会もあって、本当に自分の中でも好きな川です。

「私と矢作川」ということでずっと話をさせてもらいましたが、河川といっても土木もハードとソフトと広く分野がありますが、もともとの川の中でも私の特に関心があるのはソフトの部分です。土木で計画をして、施工して、利活用して維持管理をするという段階、いろいろな段階がありますが、その段階をソフトに当てはめると、例えば、合意形成をどうやってうまく円滑に進めることができるかとか、人がどういう空間を利用しているかという利用の分析、それから、実際川はどういうように管理をされているのかという管理の実態を把握したりとか、災害時には外力の分析というのも非常に大事ですけど、外力を受けて人がどういう初動をしたのかということも記録しておくことも非常に大事です。この「川と人の営み」という中で私の一つのテーマとして、地域の自治力とか、国土管理とか、そういうものに生かしていければというようなことで研究をしています。

直近の金沢大学に移る前までは、白山のところ、手取川ダムの上流の標高500メートルくらいのところの古民家におりました。東京大学が北陸サテライトをその山の中に置いたのと、あと、三重県四日市市に三重サテライトというのを置きまして、地域の活動をサポートするような機構で、私は北陸サテライトで勤務をしておりました。ちょっと紹介すると、この二つを見てもらうと、全然雰囲気の違いのところですけど、私がいたのはこの特別豪雪地帯と言われるところでして、一晩で1メートルとか雪が降るようなところでしたけれど、ここが白峰というところで、ここは古民家にサテライトがありました。この山の中の中山間地域の課題に私が何か取り組めないかということで、川もそうですし、多様なその自然

資本を生かした研究とか教育、水源地域の振興ということをやろうということで実践しました。

この地域、こういう白山市の手取川の上流、本当に山の中の集落で、伝統的な集落なのですが、そこの日本最南端の特別豪雪地帯というところで過ごしました。とても景観のいいところで、すごく楽しい2年間を過ごしました。自然資本のそういった取組ということで、白山市とかと連携しながら昨年5月に世界ジオパークに認定されました。手取川がユネスコの認定を受けた地域ということで、ある意味世界の地質遺産のようなジオパークに認定されて、そこでいろいろな活動を行いました。そのジオパークというものを生かして、研究ですと、いろいろな地域から学生さんがやってくるのですけれど、山村のことを知りたいとか、雪で発電をしてみたいとか、フィールドワークの場として、この白山の地域を活用したりとか、地域連携として、こういう皆さんとつながるような、水リレーというものを後からご紹介しますが、そういった地域連携をしたりというような、いろいろなことが2年間の中でできたなと思っています。ちょっと簡単に自己紹介させてもらいました。

今日の市民主導の中で、まず、川の空間を生かすことというのは、改めて何で重要なのだろうかということのをちょっと考えてみたいなと思いました。これ、私の地元の遠賀川です。私は高校時代、この潜り橋というのを渡ってこっちに行っていたのですけれど、よく見ると、この定規断面のフラットな河川敷があって、よく見る河川敷ですけれど、ここが私が大学生になる頃くらいにこんなふうになりました。水際までコンクリートの護岸があったのですけれど、緩やかな傾斜に変えて、水際まで近づけるような空間になりました。もう本当にいろいろな人が歩くような場所になったのですけれど、なぜこういうことができたのだろうか。こういう想像力はどうして働くことができたのかということで、これは「夢プラン」というもので、これ実は、住民の方が議論して考えた結果がそういったものに反映されたということになります。

住民の人が「遠賀川夢プラン」というものをつくりまして、住民が自由に議論をして、夢だからということで、ある意味、曖昧さも含めて、夢だから聞いてくださいということで、国交省の所長さんであるとか、県の所長さんとか、市長さんにも聞いてもらって、こういう50年後の川づくりの夢を考えました。もう本当に夢物語のようなものがいっぱいあって、例えば、建設省の建物に中に水族館造りますとか、温泉施設造りますとか、屋上か

ら滑り台で降りられるようにしますとか、子どもが遊べるこういう空間造りますとか。これは1998年くらいに発足してから直後に造ったものなのですけれど、50年後だから妄想ですということで造ったのですが、意外に10年以内に。この絵で描いたこういう川を造りたいよねと言ったのが、学習用のビオトープということで、春の小川として実現したりとか。温泉はできませんでしたけど、防災施設という位置づけで遠賀川水辺館というものができたり、あと、子どもが水際まで近づける河川改修がされたりしました。50年と言っていたのですが、意外と実は「誰がいつまでに」を決めていなかったから、たまたまそういうタイミングが近づくと実現することもあるということを示したのかなと思います。こういうものを実際の国、県、市の方に聞いてもらうということが、そのときは夢物語かもしれないけど、やはり絵に描くということをする、何かのタイミングで実現することがあるかもしれないということで、やはり地域で夢を持つというのはとても大事なことだなというのを実感しました。

これを夢プラン方式というように呼んでいるのですけれど、50年後、こういうふうになったらいいなというのを、誰がいつまでにというのは逆に決めずに、イメージを議論して、共有して、時には修正できるような、そういう枠組みを持っているということが、地域にとって非常に実は何か魅力ある空間を実現するのに意外と近道だったりするのかなというふうに思っています。ですので、夢ということで、まず地域のそういう計画を持つということも大事かなと思いました。実現した場所の、河川敷でこういうマルシェを主催する人たちが出てきたりとか、こんなふうに休日は大体どこの団体がこんな感じのことを、河川敷を使ってまちにも少し波及するような、そういう賑わいのある空間に生まれ変わりました。キャンプをすると、1泊2日なので川での滞在期間がとても長くなりますし、こういう滞在をしながら、ここを楽しく使うというような、そういう人たちも増えてきました。あとは川の空間を、川というのは非常に長くて広い公共空間を持っていますので、こういう空間を連続的に使用するサイクリングロードが整備されたりとか、そういう中でいろいろな地域に賑わいを波及させるというようなことも実現できるようになってきました。

こういうように遠賀川でいろいろな活動を見ていたのですけれど、私が岐阜の各務原市の自然共生研究センターにいたときに、地元の方から木曾川のことでちょっと相談を受けたことがありました。昔、この河川敷の

北派川<sup>きたはせん</sup>というところに非常にいろいろな人が使う空間があったのだけど、ちょっと荒れてきてあまり使われなくなってしまった。そういうご相談を受けて、何かその予算があるとかそういうわけでもなかったのですけれど、じゃあ、みんなでちょっとワークショップでもやってみましょうかということで、ワークショップを皆さんと一緒にやりました。

どんなことを皆さんが考えているのかということも含めて、みんなですべて歩いてみましょうということになりました。河川敷、これは国定公園にもなっている地域なのですが、実際歩いてみると、このデッキがちょっと朽ち果てているねとか、ここがちょっと草や木が生え過ぎて見えないねとか、ここからの眺めは逆にとってもいいねとか、いろいろなことが見えてくるようになりました。そういう議論は、ワークショップという形で4回、皆さんと一緒に話をして、実際に河川事務所の所長さんとか市長さんに提案するというのを、夢ですということで行いました。大体1年間の中で地域の人が考えていることをちょっと絵に描いてみようということをしたのですが、このときもやはり誰がいつまでということを決めないということで、あくまで陳情ではありませんよということ。やはり陳情となると、どうしてもお互いに緊張感を持ってしまうということもあるので、夢という中で本質的なところを議論できるということが非常に大事なのかなということで、そういう楽しい雰囲気の中で進めました。今できなくても将来できるかもしれないねということが非常に重要だったかなと思っています。

このときに描いたものです。皆さんからワークショップでいろいろな意見を出してもらったものを、こういう絵に落とし込むということをしたのですが、いろいろ落とし込んでいくと、三つくらいにまとまりました。近づきやすい水辺ということで、教育の場としてこういう河川敷を使いたいよねと。湿地とか、生き物を採れるような、そういう空間としても大事だよという意見もありました。ここで賑わいをつくり出して経済効果のような、何か川の空間からそういう賑わいをつくり出すということもできると非常に楽しいし、どんどん地域が賑わうのではないかなというような提案もありました。それから、防災ということも、やはりいつ水が来るか分からないということで、防災を常に考えられるような拠点というのも大事なのではないかなということで、堤防沿いにこういうちょっと拠点のようなものがあつたらいいのではないかなという意見もありました。これも、どれがどの

タイミングで実現するかというのは、まだこれからのところもたくさんあります。例えば、この中でもルールを変えたら実際に実現できるとか、そういったものも含まれていますよねということで、少しずつできることからやっていきたいと思いますということでも前に進めています。

誰がどういうふうにするかという想定もワークショップの中でしました。実際川に来たことをきっかけに、例えば家族4人のキャンプで川に来たときには、川で過ごした後、カフェに行って、航空宇宙博物館に行つてとか…。そういうふうにならなくて川に来ることをきっかけに、まちの中にも効果が波及していくというような、そういうことも含めてワークショップの中で考えられたらいいですよということ、議論を進めていきました。

このときもう一つ考えたのが、実際実現した際に、自分たちができる部分と行政にお願いしたい部分というのはどういうところがあるのかということです。全て行政にやってくださいというのは、きっと地域にとってもいいことではないでしょうし、逆に地域のほうでこういうことは得意だというような提案があってもいいでしょう。利用の推進、展示であるとか、学習会やるよとか、あと実際に、ちょっと管理の面で草刈りのこういうところをやるよとか、パトロールするよとか、そういうところは地域でやって、ちょっと大きな目標の募集とか、そういうところを行政のほうでというような役割分担でこの空間を良くしていけたらいいですねということも考えたりしました。

いろいろアイデアが出てきたものを、アイデアはアイデアとして計画の第一段階として、実際はその中でどれが進められそうか、実現可能性ってどれくらいありそうか。ちゃんとルールを決めたらできそうだねというものはもうここで始められるとか、住民の人が利活用を実験的にやってみようという期間に今入っているのかなということで、第二段階のところを今されています。

実際それがいざれ何かのタイミングで行政の川を生かしたそういう事業とかに発展したときには、協議会みたいなものができて、その中で官民で議論をしていくという段階に入るかもしれません。官民の連携が深まってくると河川協力団体制度とか、こちらだったら水辺愛護会もあるかと思いますが、そういう管理の協力関係を結ぶとか、市民団体というのでも成長していくのではないかなということで、そういう段階を少し意識しながら、自分たちが今できるところはどこにあるのだろうかということでも進めていくということも大事なかなと思っています。

このとき「木曾川かわまちづくり会」という団体をその地元の方たちが立ち上げたのですけれど、ボランティアで子どもたちとのイベントを企画するようなことを考えられるグループの方と、どちらかというとな若手の事業者の方とか民間の方がマルシェをしたり、何かちょっと民間活力を生み出すような、そういった両輪でこの活動を動かしていくと、この空間をもっとよくしていけるのではないかということで、そういった観点で、民でまずできることをやってみましょうということで進めてきました。

私は共生センター、学の立場としてつなぎ役でした。この図は、やり取りをした回数、例えば電話で何回この人と話したとか何回会ったというやり取りの回数を点に表しているのですけれど、これが徐々に進んでいくと、このかわまちづくり会というところが、だんだんいろんなところとネットワークができ、行政ともつながって、ネットワークが複雑に広がっていきました。提案をする頃には、複雑にいろいろなやり取りが行われるようになって、そういう中で、活動であったりとか、いろいろなものが発展していきました。こういうのも初めから立ち上がった団体だったからこそ、少しずつ横で私も観察することができました。客観的に見たときにも、まずこういう学の間支援の人が最初にいる、主体で頑張る人たちがいると、いろいろな活動が少しずつ発展して大きくなっていくというような、そういうことも重要なんじゃないかなと思っています。

もう一つ、行政が計画をつくる場合と市民が計画をつくる場合で何か違いがあるのだろうかということです。例えば、行政が何か事業をこれからやりますというときには、事業化が決定して、そこから設計の案とかいろいろ立ち上がっていくのですけれど、その中で皆さんの意見を聞きますということで、本当に1,2カ月とかの中で、ちょっと説明会とかワークショップを聞いて、到底意見を反映できないことがたくさんあると思います。市民発の場合は、事業化前の期間に勝手に議論をしているので、自分たちでこんなイメージをつくりましたよという、ある意味準備計画みたいなものを持っておくと、事業化をする際に、「あっ、そういえばこの地域でこういうことを考えていましたね」ということを考慮することができる。そこからスタートをしたりとか、少し質を上げていくということで、時間はこちらの市民発のほうがかかるのですけれど、行政発の場合と比べて、地域が何か準備計画を持っているというのは非常に大事なのではないかなというふうに思っています。

実際この自主計画というものは、遠賀川も夢プランというものを持っていましたが、大阪の寝屋川というところも市民の方が再生計画を主導して、その後、行政の事業もついてきたり、三島の源平衛川も、最初に市民の主導で始まったということで、自分たちの地域でどうしたいというのがあって、後から実現したり、いろいろなことがついてくるということがありました。先にちゃんと自分たちの地域で計画を持っていると、その後の管理に関しても、自分たちの場所として市民の方に大事してもらえる、よい効果が継続できるということで、非常にいい水辺を長く維持しているというところでは、こういう自主計画が非常に大事な役目を果たしているのではないかなと思っています。

そういう計画をつくるときに、空間で見たときにはどういう場所を生かしていくのが大事になります。堤防を生かすということもきつと大事ですし、河川敷、水際を生かすとか、水の中を走るようなイベントもできるよねとか、背後地、この愛知県だったらヒガンバナが咲いているような背後地もありますが、その川の空間といってもいろいろな空間があるので、自分たちはどこの空間をよくしたいとか、そういった目線でちょっと自分の地域の川を見てみると、何かわくわくするようなものが眠っていたりするのではないかなと思っています。こういったところから議論が少しずつ深まっていくといかないかなと思っています。

川の形によってタイプも恐らくあるだろうということで、こういう堤防を持ったような築堤型の川でその自己水源、山から水がちゃんと流れてくる自由形のこういう川だと、割と広い公共空間があることが予想されますので、こういうところだと、堤防からこの空間の中のどこを生かすかというところで少し考えられるのではないかと。あと、自分で水がしっかり流れてくるところで砂州というものが少し副産物として発達していたりすると、こういうところも子どもの遊び場として、狙ったものではないけどちょっと期待できるような、そういうものも含めて川の中をどういう空間にしていこうかということを考えられるのではないかなと思っています。もう一つ、堀川のような感じの自己水源を持たない掘り込み型の、堤防ではない川ですね、そういう川は水がよどんでいたりとか、どうしても水質というのは期待できないことが多いかと思います。その場に身を置くということも川の価値かなということで、水質には期待しないのだけど、水の風景を生かしましょうということで、いろいろな地域で舟、舟運であったりとか、川沿いでちょっとマルシェ



をすとか、これ黄色いハンカチのこういうのをちょっと掲げているとか、カフェを置くとか、水質以外のところで何かできるようなところという、自分の地域の川がどういうタイプでどう生かせる部分があるかを知るといふことも、いろいろな可能性につながると思っています。

川という空間は癒やしの場でもあると思いますし、学びの場とか、生物との触れ合いとか遊び、時には信仰の場でもあるような、そういういろいろな魅力を持っています。そういうことを少し再確認すると、自分の地域ではどういう魅力の生かし方ができるのかというようなことが考えられるとか、また、楽しいことを考えられるのかなと思っています。

川の空間を生かすということも非常に大事な観点ですけど、その川を生かすために市民の方の力というのが何で重要なのかということも併せて考える必要があるのかなと思っています。現在、人口が減少していたり、高齢化とか、国としての課題もありますが、実際に河川管理について少し田園地帯の自治体で話を聞いたときには、こんな実態もありました。「うちの役場には河川担当が1人しかいません。土木課とかというところで河川担当という形でいますということと、管理ということで本当は除草とか点検とか多自然川づくりのような環境創出もしたいのですけれど、お金的にもマンパワー的にも非常に大変なのです」ということでした。小さい川でこういう話をよく聞きます。川を管理するには河川法という法律で整備計画という短期計画を立てる必要があるのですが、「うちには管理している川が200水系くらいあるのですが、整備計画はまだ30程度で、1年に1個つくるのが精いっぱいなかなか追いつきません」というような、実際そういう実態を抱えているところもあつたりします。

もう一つ、市町村の管理している川で、どうしてももう管理がしきれないので県に移管をする、準用河川を二級河川にしてくださいというようなことも起こつていたりします。あともう一つ、これは結構大事だなと思ったのが、市町村が合併をしていった際に、準用河川からもうただの水路、普通河川という法定外の川になることで河川台帳から抜け落ちてしまうことです。先ほど八木副大臣がどの川にも名前があるとおっしゃられていましたが、川の名前すら台帳から抜け落ちて、「この台帳、私がいなくなったら、もうここの川の名前は管理上はなくなってしまう」というような、そういうところも中には少しずつ実態として出てきています。地方のほうに行くと、なかなかその管理も難しくなつてきているとい

うことが少し感じられると思いました。

もともと川の管理というのは、民が主導しながら集落とか組合の中で組織が活躍していくという中で行われてきたものですが、高度経済成長期に入って利水を高度化していく中で行政が管理の中心に変わっていきました。現在、人口減少の局面であるとか、新たな活動をしていく中で、官民連携した形で進めていこうというところで、特に自治の力、地元の力を生かした管理をしていくということが、管理をよりいい状況に保っていくという上で非常に大事になってきているのかなと思っています。

私は、地域の市民の力というのがどのくらい川に貢献しているのかというのを、少し博士課程のときに研究したことがあります。実際何をしたらかという、全国の川で活動をする人に、川で何人くらいで何時間くらい活動していますかという話を聞きました。清掃活動を6人で1時間、春夏秋冬4回していますよという、これ単純に掛け算すると24マンパワーかかっています。これを私は「活動量」というふうに呼んでいまして、この活動量が実際のどのくらいあるのかということ、これが実際のどのくらい河川管理に貢献しているのだろうかということ調査していました。そうすると、大体国民一人当たり年に2時間分くらいに相当するくらいの市民の力というのがあります。年に2時間というのが多いのか少ないのかというのはありますが、河川管理、例えばソフト事業費の1割程度。お金の価値に換算するとそのくらいの価値というのが、私が調査した範囲でもあるのではないかといいようなことでした。そういうふうで定量化することで少し市民の価値というものを出したことがありました。

もう一つ、やはり市民団体の方にお話を聞いていくと、大体90年代くらいにたくさん団体が発足して、2000年代とかにすごい勢いで活動が増えていきました。やはり活動をしているとみんな平等に年を取っていきますし、その中で後継者とか、会員がちょっと減っていつていまして、いろいろこれはもう全国共通にいろいろなところで抱えている問題です。「20年問題」というように言われたりもしますが、もう今、25年目とか、早いところでは30年とかになっているところもあるかと思っています。では、実際困っているということはいろいろなところで聞くのですけれど、どうやったらその市民団体を活発な状態に保てるのだろうかということも非常に大事かなと思っています。

この中でちょっと工夫しているところというのがあり

ました。長野県の諏訪湖で1980年から活動している「湖浄連」という団体では青年会議所の40歳の人が会長になります。この人が湖浄連の会長職になって、1年間、当番みたいな形で続けて、この会長の仕事が終わると顧問になる。ですので会長は永遠の40歳で、顧問がどんどん増えていくということで、当番制にすることで、負担の分担であったりとか、新しい人が入ってくるという、そういうのを構造的に確立しているような団体もありました。

これは福岡の団体で、私の地元の団体ですけれど、団体の二重構造。これNPO法人と任意団体の両方持っていて、メンバーはほぼ同じなのですが、この両方持っているというのも大事なのではないかなということ。これは、例えば任意団体のほうは行政の人とかと連携するときに広くいろいろな人が入ってこられて、何か委託事業を受けるとか、助成金を受けるとか、そういう性質のものはNPOでやるよとかということで、いろいろな人と連携をしやすくするという意味で、団体の二重の構造を持っているということも一つ重要なのかなと思っています。

その後、世代の会員種別があって、小学生（ジュニア会員）、中学生、大学生、学生、社会人が会員ということで、こういうふうに徐々に、当時小学生だった人が、もう今、会員で副会長をしているとか、今我々世代の30代くらいになっていったりとかして、そういう中で徐々にその当時の一緒に活動していた子たちで地元に残った子がそこを継いでいくことでうまく成功しているような団体もあります。あとは、流域で緩やかに連携をすると。これは矢作川もいろいろなところで連携をしていると思いますが、そういう連携をするということも重要なかなというふうに思っています。緩やかな連携の中でできることを探すのですね。

あとは、外からの応援団ということで、地元の人よりも少ない地域なのだけれど、外の人「関係人口」として時々やってきて、一緒に活動しようというスタイルもあります。長崎で「おもしろ河川団」という活動をしている人たちですけれど、こういう外からの応援団を引っ張り込んでくるというようなことも、これからの社会の在り方として十分考えられることかなというふうに思っています。

ですので、後継ぎということで難しくなってしまうことが多くあるかと思うのですが、継ぐというのはなかなかやはり難しいのかなと思うところもありまして、例えば、継ぐのではなくて、新しい団体を育てるということ

もあります。20年近く活躍してきたところに新しい人が入るととても大変なので、新しい団体が発足して、それがおいおい継いでいくような、そういう形になっていくということもあっていいのではないかなということ。九州のほうでこういったことが議論をされていたりします。

実際この20年活動していた方は、最初、協議会みたいな感じから始まって、意見を発表したり、よその地域を見に行ったり、特に海外にも行ったり講演会に行ったり、いろいろな経験を積んで20年というのを過ごしてきました。みんなこんな時代もあったよねということで、この新しく生まれた団体の人たちも、この中でまた20年、いろいろな活動をしていくということで、その新しい団体の芽吹きを支援するというのも大事なかなというふうに思っています。

今、遠賀川で「めだかの学校」という小学生向けのイベントで付き添いで来ていたお母さんたちに、もう子どもが大学生や社会人になって子育てが一段落したお父さん、お母さんたちが声をかけて、お話ししませんかということで、「親めだかの会」というのが今できています。そういうお父さん、お母さんたちが今活動していたりとか、徐々に世代の緩やかな新しい芽吹きというものを支援するというきっかけづくりというのも非常に大事なかなと思っています。もう一回、そういうプロセスをつくっていきましょうということで、なかなか難しい後継ぎの問題を、こういう発想で考えていくということもいいのかなと思います。

もう一つ、今日の三つ目のところで、流域の連携ということを少しご紹介したいと思います。矢作川は流域の連携ということを以前から先進的にやってきた地域だとは思いますが、ある地域でこんなことがありました。この赤い川なのですけれど、非常に藻もあって、中にも水草が生えるようなところが、あるときから矢板護岸を打って、三面張りになってしまいました。どうしてこうなってしまったのだらうと地元の人に話を聞くと、ここはよくあふれるということで、速く水を流したい、そうしたらきつとあふれなくなるだろうということで、コンクリートにするときつと速く流れるということで要望されたのです。速く流れると、下流のほうでちょっと狭くなっているところがあって、今、この工事がちょっとずつ進んでいるところもありますが、恐らく下流のほうで今度あふれてしまう状況をつくり出してしまわないか。その地先はよくなっても、下流がまたリスクを背負ってしまうということは、流域治水ということがい

ろいろな地域で語られていますけれど、小さい視点で見ると、こういうことも大事なのかなと。実際こういう問題もいろいろなところで見ていて、自分の地域の水の流れを良くしてくださいということをする、下流が今度大変なことになるということで、やはり流域で考えていくということが非常に重要だなという出来事でした。推進派の人は早くコンクリートにと言いますが、コウホネが消失するとか、トキの野生復帰を控えているのに心配だとか、そういういろいろな意見が流域の中でもあり、それはやはり合意形成するということが流域治水を進めていく上では非常に大事なのかなと思っています。

この流域治水の合意形成ということで、我々が少しそれに近いことを考える機会がありました。今年、白山手取川ジオパークというものが世界認定されました。この川の流域の90%以上が白山市ですが、ここでお祝いしようということになりました。手取川の流域がこういう形なのですけれど、手取川を上流から中流、下流とずっと下っていく水のリレーをやりましょうということで、白山の雪解け水をこのトーチに詰めて、上流の子どもからスタートして、途中、おじいちゃん、おばあちゃんの介護施設の前も通って、いろいろなところで中継をして、最後、海で待っている市長に水を届けて、市長が海に水を返すところまでの70キロを1,000人くらいの人で、いろいろな応援も得ながらやりました。

これは5月で、7月の「水辺で乾杯」のときに合わせようということで、1カ月くらいしか準備がなくて、有志でやったのですが、大変な思いをしたのですけれど、ちょっと当日の雰囲気をご紹介します。(映像を視聴しながら)これは開会式のときですね。まず、前日に水辺で乾杯で、「ジオパーク おめでとう」ということでお祝いをしました。上流から河口まで水を運びますよということで、このたき火で雪を解かして、この解かした水をトーチに詰めて、これを翌日、いろいろな地域の人が協力して海まで運ぶということをやりました。子どもが第一ランナーで、白峰地区の子どもがやってくれていますね。こんな感じでちょっとずつ走っていく。聖火リレーではないですけど水のリレーで水を届けるということを下流までやりました。

ここはいろいろな市町村が合併をしている地域で、合併している地域同士が連携するという機会がなかなかなかったのですけれど、上流から水が来るのだけど、うちの地域が協力しないわけにはいかないというような感じで、みんな、地域の自負感みたいなものが少しずつ良い方向に向いて、地元のある公民館の方は、1カ月しか時

間がなかったのですが、「うちの地域にこういう人がいるよ」とか紹介してくれたおかげでこれが実現したということです。実は、公民館とかそういうところというのは、ふだんからコミュニティーの中心ということで、いざこの流域治水を議論するときにも、この水リレーというのがある意味合意形成の素地の可能性をちょっと示したのではないかなということも少し思いました。

上下流を考える、お互いの地域以外のことを考えるという上下流のそういうつながりということ認識できたのかなということで、流域治水でいろいろなことが言われていますけれど、今回のその水リレーというのが、地域の自治会の存在であるとか、地元の公民館の力とか、水リレーを通して上流、下流がつながる、関係を意識するということとか、官民の連携とか、そういったことが一つのこの水をリレーするという中に、流域治水の合意形成として込められていたのではないかなというのは、やってみて後からちょっと思うところもありました。

こういう何か流域でつながるきっかけというのを意識するというのも非常に大事なのかなと思っています。今、大きく川の空間を生かすということと、市民の力を生かす、流域で連携をすることの重要性ということで、三つの重要なものがありそうだとお話をしたのですけれど、では、これからの矢作川の川づくりを議論していく上でどのような大事なことがあるかなということで考えていきたいなと思っています。

一つ、国の河川環境の政策というものが戦後の高度経済成長から実装されてきました。その中で河川法が変わったりとか、多自然川づくりになったりとか、子どもの水辺とかいろいろな取組がいろいろなその社会の要請に応じて行われてきました。その中で、各地域地域で、矢作川も非常に早い時代から、いろいろな環境の取組というのが国の政策とはまた別の軸の中でも行われてきました。

矢作川の実施策の特徴の一つとして、水辺愛護会の存在というのは非常に大きいのかなと思いました。やはり、30年の活動の中で矢作川の空間を良くしてきたというのは本当にすごい成果だったのかなと思います。後継ぎとか、もちろんそういう課題もあるとは思いますが、その中で、こういったことを継続していくこととか、地域で価値として認めていけるようなところも議論していけたらいいのかなと思っています。それから、矢作川の特徴のもう一つは、多自然川づくりが非常に早い時期から検討されてきたということです。近自然河川工法というものを早い段階でスイスに視察しに行つて、多

自然川づくりというものを入れるということで、古単水辺公園もそうですし、児ちごのくちノ口公園とか、豊田市矢作川研究所というのも今年で30年ということですが、早くからいろいろ川づくりに関して議論をする、そういう場があったということは、矢作川の川づくりの一つの特徴でもあるのかなと思っています。今日も古単水辺公園へ行くと、非常に良好な空間が維持されていましたけれど、そういう施工した現場を今後どういうふうに維持をしていくのかとか、そういう現場の再確認という視点もこれからの川づくりとして議論していけたらいいのかなと思っています。

それからもう一つは、やはり川の空間で、今は国も賑わい・利活用のエリアをどんどん拡大していくというような制度の後押しをしてくるようになりました。占用許可の期間というのも前よりも長くなり、場合によって最大20年使えますよとか、いろいろ使いやすくなってきたというところで、実際にその自分の川の中でどこにポテンシャルが、賑わいをつくる場がありそうかということも大事かなと思っています。この豊田市であるとか、岡崎市であるとか、矢作川の流域にもそういうかわまちづくりのスポット、非常に多くの人で賑わう場所というのがありますので、これから新たに賑わいがつくれる場所、どんなところがあるかなという、そういう視点もこれからの矢作川の川づくりの中で重要な視点なのかなというふうに思っています。

それから、矢作川のもう一つのまたすごいところが、流域圏のそういう懇談会であるとか、流域で様々な連携をするということが、昔の矢作川方式の時代から脈々と行われてきたということです。山で考えたりとか、海で考えると、川とか、そういった矢作川の流域連携というところで、今、新しく流域治水という新しい河川管理の考え方も始まっている中で、市民参加でどう流域治水ができるのかなとか、そういうことも矢作川のこれからの川づくりの中で議論をしていけるといいなと思っています。

最後に、この前ちょっと九州にも行ってきたのですが、九州の川づくりで特徴的なソフト施策を少しだけご紹介して終わりたいと思います。九州の国土交通省の出張所があります。出張所単位で川づくり交流会というのが設けられていて、そこで議論する、そういう場がありますよというのがちょっと特徴的です。あと、九州という、こちらでいったら中部という単位で様々な団体が連携をする組織があります。時々お互いの地域で励まし合うというような、そういったことがしやすい。そういう仕組

みというのが20年くらい前にできています。こういうことも中部という一つのつながりとか東海という中で考えていけたりすると、より自分たちで高め合っているのではないかなとも思います。この川のワークショップというのを佐賀県でやったり、宮崎県でやったり、リレーフラッグというものをそれぞれの地域で持ち回りで回して行って、川づくりの大会を毎年行って、おまへの地域の川は元気かというようなことを毎年確認し合うというような、そういうことも非常にいいのかなと思っています。

あと、これも20年前に「九州 川の魅力再発見プロジェクト」ということで三本柱というものを立てています。何をしたかという、リバーツーリズムで川の空間に人をちょっと連れていく、川の空間で旅をしようということであるとか、リバーズスクールで川を教育の場として使うということ、川の情報室というものを設置して、どんどん川の魅力を発信するよというような、こういう三本柱を20年前に行って、今もこれが一つの流域の核となって活動に息づいているというような、そういう独自の施策というのがありました。こういうものも何かヒントになる部分とかというのがあったりするのかなとも思っています。いろいろな地域で活動が行われていました。

ということで、今日の私の話の中で市民主導ということを生かすときには、人を生かすであるとか、川を生かす、流域で連携するというような、そういう三つの観点から考えられるといいのかなと思います。団体の活動は継ぐのはなくて、新しい団体の芽吹きを支援するであるとか、河川空間の活用という中では、夢プラン方式で地域の準備計画というものをつくってみてはどうでしょうかということ、流域連携というものの中では、少しずつ流域で取り組めることを意識して、流域治水の合意形成というようなところに後々発展するような、そういう視点を私からご提案できたらなということでお話しさせてもらいました。

拙いお話になりましたけれど、私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

○司会 坂本様、ありがとうございました。矢作川に大変寄り添って頂いて、聞くほうとしてもとても楽しく聞かせて頂きました。ありがとうございました。

## ■研究報告 遊べる川がもたらすもの

### —子どもと保護者へのアンケート結果から—

○司会 続きまして、市民連携に関連する矢作川研究所の取組を、矢作川研究所研究員山本大輔より報告します。

○山本 ただいまご紹介頂きました豊田市矢作川研究所、山本大輔です。よろしくお願ひ致します。私のほうからは、今回タイトルで「遊べる川がもたらすもの」ということで、特に水辺愛護会であるとか、ふるさとの川づくりといった直接的な環境の整備で良い川に、良い水辺になった場所というところで、それがどんな効果があるのかなというところを少しご紹介できればなと思っています。

まず、開会で所長の宮田よりご挨拶もさせて頂きましたけれど、今年、矢作川研究所30周年という中で、これまで様々な場面において市民の皆様のご協力を頂いて、それがあったからこそここまで来られたのかなと思っています。いろいろな連携をさせて頂いた中で、今日は市民連携による環境整備ということで、ちょっと極端な写真ですけれど、これがこうなりましたというところで、水辺愛護会の皆様への聞き取りでも成果として、「川の眺めが良くなった」、「川に近づけるようになった」というのはやっぱりかなり大きなところかなと思っています。

また、この写真にあるのは、ふるさとの川づくりということで取り組んでいる岩本川の様子ですけれども、もともとというか、ちょっと前まではこんな感じだったのが、今ではこんな状態になっているというところで、この岩本川での調査で得られたことを中心に、遊べるようになった川の効果についてご紹介したいと思います。と言いながらですけれど、そもそも遊べる川って必要なんでしょうかというところもあるかなと思います。そこで、過去に取ったアンケート等から見ていこうかと思ひます。1つは大人を対象にしたもので、eモニターや聞き取りの結果、もう1つは子どもを対象に行ったアンケート調査の結果になります。

まず、大人ですけれど、もうちょっと誘導に近い質問ですけれど、「安心して近づける水辺があれば、子どもが川遊びを体験してほしいですか」ということに対して、こちらはeモニター、2015年で少し古いですが、その質問に対して「体験してほしい」、「どちらかといえば体験してほしい」と答えた方がかなり多かったというところで、大人についても、子どもに川遊びを体験してほ

しいなと思っているということが言えるかと思ひます。ただ一方で、ジレンマを抱えているということもありました。こちらは小学生までの子どもをもつ母親への聞き取りということで、その一部になってしまうのですが、本当は誰々君みたいに、よく遊んでいる子がいるみたいなんですけど、「誰々君みたいに遊ばせてあげたいけど、やっぱり何があるか分かんないと思うとちょっと安心して遊ばせに行かせられない」とおっしゃる方がいらっしゃいます。ほかにも、子どもを連れていきたいなと母親は思っているのですが、家族で遊びに行くようになったときに、父親の理解が得られないとみんなで一緒に行けないみたいな、そんなジレンマもあるよというようなお話がありました。ですので、大人としては遊びたい、遊ばせてあげたいと思ひながらも遊ばせられない状況もあるということですね。

では、当の子どもはということですが、こちらは平井小学校、岩本川のそばの小学校の2年生に聞いたアンケートです。「近くの川で遊びたいですか」ということに対して、「遊びたい」と答えてくれた子がかなり多かったということです。これ、2018年度のアンケートですけれど、その後も時折取ってしまひて、多少動きはするんですけど、やっぱり半分以上の子は「遊びたい」と答えています。では、「実際に遊んだことあるんですか」というところでは、「遊んだことがある」というのが半分です。「ない」というのは半分です。半分の子が遊んでないというのか、半分も遊んでないというのか何て言うか難しいところですが、遊んだことないのは何でかという理由まで併せて聞いていますが、やっぱり「危ないと思う」とか、「汚いと思う」みたいな、子どもながらにちょっと不安に思っているところであったり、これ、「遊んではいけなひと言われているから」、先ほどの大人のジレンマそのものだと思うのですが、遊ばせたいけどあれだしなというので、「遊んではいけなひよ」と言われてしまった子どもが、やっぱり川で遊んだことないというようなこともあるのかなと思ひます。個人的に意外だったのは、「時間がないから」ですね。今の子どもは忙しいです。

そのようなこともありまされたので、遊べるようになった岩本川で、授業で川を楽しむということをやってみました。何をやったかというところ、川に行つて水に触れたり、生き物を捕まえるというようなことです。その学習の前後に、子どもを対象に川と生き物の絵を描いてくださいということをお願いしたもので、そして、その川学習のしばらく後に保護者に向けてアンケートを取つておりま

すので、そちらの結果もご紹介したいです。

まず、子どもの描いた絵です。ちょっと色が薄くて見にくいかもしれないのですが、川で授業をする前に描いた川と生き物の絵です。子どもらしいというか楽しそうな感じで、赤い魚とか、川と空、この辺で分かれているのかなみたいな感じですが、これが川学習の後にまた同じように絵を描いてもらおうと、こういうふうになっている。比べてみると、前から後でこのように変わっていき、いないもの、赤色の魚は描かれなくなったりとか、実際の川に近い形になっています。実際の川の形は、大体こんな感じですね。確かに階段があって、ちょっとワンドというかそういうのも表現されているということで、こういうふうに分かっていた風景に近いものを描く子が多かったです。

もう1人見てみたいのですが、これも学習前の絵です。やっぱりちょっと記号的というか、魚もピンク色であったりとか、虹色のカラフルな、うちの子もそうなんですけどピンク色に塗るんですね、何でかって聞くと答えてくれないのですけど。こういう楽しそうな、でもちょっと記号的なものが、学習後にはぐっと生き物が詳しくなるということで、前から後で生き物がすごく詳しく描かれていました。

あと、ちょっと気になったのは、こういう人ですね。遊んでいるような人物っていうのを描く児童がすごく増えました。どれくらい増えたかっていうと、1割ぐらいの子がもともと描いていたのですけれど、学習後にはもう半分ぐらいの子が、みんな、楽しそうに川にいる人間を描くというようなことがありました。ですので、自分の体験などを通して、「人が川にいる」という意識が子どもの中にも芽生えるのかなというように感じています。

では、今度はその保護者にこんなことを聞いてみました。岩本川という川ですけれど、「そこで子どもと遊んでいますか」というアンケートを取らせて頂きました。ほとんどの方は「遊んだことはない」ですけど、注目したいのがここですね。「川の授業の後から遊んでいる」という方が1割ぐらいいらっしゃいました。子どもが、授業ではあるのですけど川に行ったことによって、その後、1割の方が親子でまた川に行ってくれるというのは、正直驚いたというか、川に来る人が増えるといういい効果があるんじゃないのかなと思いました。

そして、その子どもが川で学習をする回数が増えると、川の認知度、左側なのでちょっと分けがざっくりしてきますけれど、左から右に行くにつれて学習の回数が増え

ています。そうすると、その川の名前、そして場所も両方とも分かりますよという保護者の方が多いです。「子どもが川で学習をすることによって川への関心は高まりましたか」という質問をすると、やっぱりこちらも学習回数が多いと「高まったよ」と答える方が多かったということで、子どもが川で遊んだり、授業するっていうことだけでも保護者の川への認知度、いわゆる関心を高める効果があるのではないのかなというように思っています。

あとは、その効果ということで宣伝みたいになってしまいうのですけれど、その岩本川で学習をずっとしてきた平井小学校、今年度、博報賞という教育関係の賞を受賞されました、私も「賞状を見に来てください」と呼んで頂いたものですから、賞状と、あと校長先生と一緒にツーショットを撮らせて頂いた写真です。こんな効果もあるのではないのかなということでご紹介です。

ということで、短い時間ではあるのですけれど、遊べる川にまで整備して頂いた結果、眺めがよくなったりというのももちろんあるのですけれど、さらにこうした効果があるのではないのかなということで、子どもの絵なんかから見ても身近な川に詳しくなったり、人が川で遊ぶという楽しい思い出が得られて、それは結局、ふるさとへの愛着につながるのではないのかなというように思っています。思っているというか、思いたいというか、というところです。

そして、その子どもが川で遊ぶと、子どもだけでなく大人、保護者も子どもと一緒に川に行くとか関心が高くなるということで、そういう素敵な空間、場ができることで、またそこに地域の人が関わってくれるようになるのではないのかなということで、こうした遊べる川ができるということは、水辺愛護会とかの活動のやりがいであるとか、このようにして子どもとか地域の人に来てもらうような手段にもなるのかなと、そういう活動のヒントになるのではないのかなということで、今回ちょっと時間を頂いて紹介をさせて頂きました。

やっぱり川にいる人はみんな笑顔なんですよ。こういう場所が増えると非常に嬉しいなというように思っております。短いですが、私からの報告は以上にさせて頂きます。ご静聴ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。ここで20分程度休憩をとらせて頂きます。先ほど山本のほうから紹介しました活動に関する資料がパネルで展示されておりますので、よろしかったらご覧ください。それでは、休憩とな

ります。また再開のときに席についてお待ちください。  
よろしく願います。(休憩)

## ■意見交換 市民連携で進める川づくり

○**司会** これより、「市民連携で進める川づくり」と題しまして、意見交換に入りたいと思います。パネリストのご紹介をさせていただきます。向かって左側から当研究所で市民連携事業に多く携わっております矢作川研究所研究員、山本大輔です。続きまして、先ほどご講演頂きました金沢大学講師、坂本貴啓様です。続きまして、研究所報告でもご紹介した岩本川で川づくり活動をされておられます岩本川創遊会会長の小野内康伊様です。最後になりますが、行政の立場から豊田市河川課長の須藤友章です。ここからの進行は、矢作川研究所、山本大輔が務めます。それでは、よろしく願います。

○**山本** ありがとうございます。今、司会から前に座らせて頂いているメンバーをご紹介頂きましたけれど、改めて、それぞれ自己紹介というか、普段行っていることなんかも含めて自己紹介していけたらと思っております。

僭越ながら私から、矢作川研究所の山本です。実は2年間、昨年度と一昨年、環境部環境政策課のほうに異動しておりまして、3年ぶりに矢作川研究所に戻ってまいりました。その前に研究所にいたときには、今日のふるさとの川づくりであるとか、あとアカミミガメの防除プロジェクトなんかで市民とか事業者の皆様と関わっていることを多くさせて頂いておりました。また今年度戻ってきて、引き続きふるさとの川づくり、今、広沢川という川で進めていますけれど、そういったところを担当しております。今日は、この場では進行ということでさせて頂きたいと思っております。どうぞよろしく願います。

○**坂本** 改めて、金沢大学の坂本です。川を生かしたまちづくりで、川づくりは人づくりというのをテーマにいろいろ研究とかを今、行っています。初恋の川は矢作川です。よろしく願います。

○**小野内** 岩本川創遊会の小野内といいます。パンフレットにも書いてあるように、ふるさとの川づくり事業を機に扶桑町と百々町のお父さん世代で団体を作りましたと言われたときに、たまたまこのふるさとの川づ

くり事業を行うときの矢作川研究所の所長がうちの扶桑町の出身でありまして、家も近い、岩本川にも近いということで声がかかりまして、会長職ということでやらせて頂いております。

本当に岩本川は、生まれ育った地元の目の前で、それこそ30歩ぐらいあれば岩本川に着くというところに住んでおりますので、今日は岩本川でということでお話しさせて頂きたいなと思っております。よろしく願います。

○**須藤** 河川課長をしております須藤といいます。日頃はお世話になっております。先ほど冒頭の一番先に挨拶、宮田所長からありましたように、豊田市内には愛護会というものが25団体ありまして、700名以上の方が河川環境の維持向上に向けて活動してくださっています。今の小野内会長もそうですけれど、創遊会の方々にも取り組んでもらっております。行政としては非常に助かっておりますので、この場をお借りして改めてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。私自身が河川課長になって3年目でございます。普段から河川について、利水に関しては豊田市はあまり関係ないのですが、治水と環境という面で日々、部下と一緒に取り組んでおります。本日はよろしく願います。

○**山本** このようなメンバーでやっていきたいと思えます。いろいろな話に入って行く前に、先ほどの坂本先生のご講演の後にあまり質問とかの時間を取ることができなくて、この後もひょっとしたらできないかもしれないと思いましたので、ちょっとこの前に小野内さんであるとか須藤さんから、坂本先生のお話を聞いて感想であるとか、もうちょっと聞いてみたいなみたいなのところがあれば伺いたいと思いますが、小野内さん、いかがでしょうか。

○**小野内** 先ほど先生のお話の中で20年問題ということがありまして、やっぱりいろいろな河川に関しての団体の継続というのが非常に難しいなというようには痛感しているところですが、その20年問題という問題の中で、維持していくよりも新しい団体のほうの協力をしていったほうが良い、芽吹きを支援していったほうが良いですよというようなお話を頂いていたのですが、その芽吹きを見つける方法だとかなんとかかというのがもしあればちょっと聞いてみたいなのというのが先ほど聞いていて思ったことですが、よろしいでしょうか。

○坂本 なかなか難しいですね。ただ、小学生ぐらいの子を川に連れてきていたお父さん、お母さんたちが、子どもが大学生になって子育てがちょうど終わった頃にご近所同士数人で集まると、きっと何か新しいことができるんじゃないか。いきなり活動するというのは難しいと思うので、何かちょっと集まりませんかというところから始めてみる。九州のほうではちょっとそういう活動をしているよというのを聞いているので、どうでしょうか。

○小野内 分かりました。ありがとうございます。確かに興味を持ってくれる、先ほど山本さんのほうから岩本川についてお話をして頂いた中で、親の人たちがちょこちょこ子どもを連れてきてくれているので、それはすごくありがたいことだし、嬉しいことだなというように思います。けれど、いざそういう人たちに声をかけるというのは僕らもちょっと勇気がいるので、どこかのタイミングでそういうのが見つければ、今後のそういった後継問題だとかというのが、新しい道筋が見えるのかなというようには感じましたので、参考にさせて頂きたいなと思います。ありがとうございます。

○山本 続いて須藤さん。

○須藤 先生のお話を聞いてちょっと感じたのが、地域の方が川に関わりをもつというようなところですね。あともう一つ、研究所の発表にありましたように岩本川創遊会の皆さんがああやって維持管理に取り組みされているというようなところで、愛護会の活動もそうですけれど、ちょっと聞くのが、その活動に対するそのモチベーションの維持の仕方をどうしたらいいのか。その維持管理をやっていくための動機づけといいますか、何を目的に、最初はその河川環境を良くしたいという思いがあるんですけど、一度きれいになると、じゃあそれをどのように維持していくんだというモチベーションが低下していくんだっていうような声もちらほら私聞いたことがございます。矢作川研究所が地域の方と一緒に養蜂をしたりだとか、たけのこを採ってメンマを作っているとか、いろいろな活動をしているのですが、何かその愛護会活動、こういったものに対して見返りと言いますか、何かモチベーションを維持するための何か方策みたいなものがあれば、先生が見聞きしている中であれば、ちょっとアドバイス頂きたいなと思いました。

○坂本 多分真面目にこういうふう守っていきたいと思えば思うほど、なかなかモチベーションって維持されない。人間ってずっと意識を高く持っていると、やっぱり疲れてしまう瞬間って必ず誰しもあると思います。だから何かこう、やっぱり楽しいことっていうのが合わせて一緒にあるというのが必要だと思います。維持管理をするとか、環境を良くしていくというだけではなくて、自分たちがそこをどういうふう楽しめるかとか、何かそういう発想というのも大事なのかなと思っています。そういう意味で、何か楽しいことを自分たちで企画するという、何かそういう段階がもう1つ来てもいいのかなと思いました。

その楽しいことの中で、先ほど紹介した遠賀川の話でも、みんなで出張所っていうところでご飯を作って食べながら、20年以上毎月集まって川づくりの計画を立てるんですけど、食を共にすると、川のことだけではなくて、ちょっと何か普段の息抜きのような、そういうこともちょっと織り混ぜながらというのがいいのかなと。あまり体育会系になりすぎると非常に苦しくなってしまうというのもあるので、楽しい雰囲気づくりと、楽しい場を自分たちでどう計画するかとか、そういうこともちょっと考えられたら、長く緩く続けられるのかなと思いました。

○山本 ありがとうございます。今、その楽しい場をつくられたらというお話を聞いて、ちょっと私のほうでも思ったのが、多分、水辺愛護会の皆さんに、前に研究所にいた吉橋さんが聞き取りした中であったかなと思うのですが、何て言うんでしょうね、定期的というか、活動のときにみんなで集まるのがちょっと楽しみだなみたいな、そんなことをおっしゃっているところもあったかなと思って、聞いていました。

同じように、川ではないんですけど、私、去年、環境政策課で湿地の担当をしていたのですが、そういう湿地を管理している地域の団体もいろいろなタイプの団体があったのですが、やっぱりすごく元気なところというのは、みんなで集まることが楽しいみたいなことを言ってらっしゃいましたので、その人の性格によるところもあると思うのですが、そういった、ただ集まってくるだけでも一つの楽しみになるのかなと思ったところです。ありがとうございます。

では、ここからと言うか、そのままどんどん話を進めていきたいと思うのですが、テーマとして今回、「市民連携で進める川づくり」とさせて頂いてはおりま



す。頂いてはいるのですけれど、やはりこれまで坂本さんのお話でも、先ほど須藤さんからもありましたように、何より皆さん、今日、水辺愛護会の方が多く来ていらっしゃるかなと思うのですけれど、市民連携というか、市民の皆様でやって頂く川づくりとか水辺づくりみたいなのは、結構もうできているところがあるのではないかな、多いのではないかなと思います。そういうところで、こうしていくと良いとか、こうしなきゃいけないということを今日この場でまとめようとは思っていません。何をしたいかと言うと、何か普段の活動であるとか、そういうところの一つヒントというか、こういうのをやってみようかなとか、こういう気持ちになってみようかなというようなヒントが何か皆さんに一つでも届けばいいなと思って話を進めていきたいなというように考えております。

ということで、まず、坂本さんのお話の中でもいろいろな市民の方の川づくりへの関わりというのがあったかと思えます。今日は何より岩本川創遊会、小野内さんに来て頂いているというところで、実際、市民の側っていうと語弊があるかもしれませんが、その立場からいろいろお話聞いていきたいと思えます。

そもそもというところで、岩本川創遊会でやっている活動というか、そのメンバーにどんな人がいるのかとか、いつぐらいからやっているかというのを改めてご紹介頂きたいと思えます。

○小野内 先ほどありましたふるさとの川づくりということで、2017年に発足しております。その前のワークショップでいろいろと、先ほど坂本さんの話ではないですけど、岩本川を浚渫するということがありました。岩本川はもともとは、先ほどちょっと写真が出ましたけど、コンクリートで固められた川ではなく、昭和47年の集中豪雨で橋が2、3本流れたのかな。土砂が大分流れてきて悲惨な状態になった後に護岸工事が始まっている。その後、こんな川になりましたっていうように草刈りをやっていた最初の形があったと思うのですけれど、本来ならば春と秋で川に入ってちょっと草刈りをしていたんですけど、ちょっと手に負えなくなってしばらく放置されていました。それから土がたまってどうにもならなくなってきたということで浚渫しようという話が出て。そこでふるさとの川づくりという事業がありますよということになって。

ふるさとの川、要は浚渫した後に川がどうやって変わっていくか、どうやって変えたらいいかねという話に

なりました。岩本川というのは、ちょうど扶桑町と百々町の境の川になっておりますので、どちらのお父さんたちにも協力してもらえればやっていけるんじゃないかなということでやり始めたのですけれど。そこで、じゃあ誰にしようという話で、一番川に近い人から順番にということで、7年、8年前のときに平井小学校の低学年だとか中学年のお父さんをターゲットに、私の子どもはもうそのときはいなかったんですけど、ちょっと声がけしてもらって始めたのが創遊会のきっかけとなります。

この岩本川創遊会という名前にもあるとおり、自分、一生懸命草刈りばっかやってもしょうがないよねということで、創って遊ぶ会でもいいんじゃないかなということで創遊会という名前にしています。活動としては、草刈りだとか治水のほうに関しての管理と同時に、川の流れがどうなっていくかというののもちょっとずつ、それと生態系ですね。矢作川に接していますので、浚渫した後、草木1本ない状態のところからどんな生き物が、どんな魚が上がってくるかなっていうところも踏まえながら、今、草刈りをしながら、年に1回かな、ガサガサで魚捕りをやって、子どもたちと一緒に活動しているという格好ですね。

たまたま近くに平井小学校がありますので、平井小学校の課外授業、要は平井小学校の校区の中にはこんな良い川があるよということで紹介させてもらって、今、川学習のほうもやっておりますので、そちらのほうのサポートもしております。今、こんなような活動ですかね。

○山本 ありがとうございます。そうですね、本当に最近では小学校の対応が毎年結構あるかなという感じもありますね。今、メンバーは何人ぐらいで活動されているのですか。

○小野内 発足当時は8名ぐらいだったと思うのですけれど、ちょっとずつ、一生懸命勇気を振り絞って声をかけて14人になったのかな。

○山本 14人って結構増えましたね。

○小野内 大分頑張ってもらいましたね。

○山本 最初は結構PTAだとかそういうつながりなんかで声をかけていた印象もありますね。

○**小野内** そうですね.先ほどちょっと話しましたが、とにかく川の近くに住んでいるお父さんと、同年で小学生の子どもをもったお父さん. もう1つはやってくれそうなお父さんということで、百々の人から見ればちょっと離れてはいるのですけれど、そこからやってくれそうな川が好きそうな人に声をかけて、たまたま知り合いが近くにおってやってくれそうな方だったので、そこから百々のほうは広がっていったのかな. その人の親戚だとかいろいろ同年代のお父さんたちに声をかけてもらって、1人、2人と増やしていった次第でございます.

○**山本** ありがとうございます. 親戚っていうのもなかなか一つの手段かなと今ふと思います. 確かにそうですね. 義理の兄弟で入っている方もいたな、なんて思っています. そういうメンバーですけれど、川が好きそうとか、関わってくれそうな人にも声をかけながらというところだったのですけれど、きっと多分そうじゃない人もいたのではないかなと思って. 単に川に近いから呼ばれたみたいなのもいると思うのですけれど、そういう人はいましたか.

○**小野内** 1人だけちょっと川から離れているのですけれど、一応行政の方なので、「ちょっと一緒にやってよ」ということで引き込んだことがあります.

○**山本** ありがとうございます. 何かそういったいろいろなメンバーがいる中で、岩本川創遊会に入って、小野内さん自身でもそうですし、ほかのメンバーで何か印象的な意識の変化とか、川に関わるようになって変わったようなことはありますか.

○**小野内** 当初から岩本川が目の前なので、毎日見ているので、草がぼうぼうになるのは何ともならんと思っていたのですけれど、自分としては、その川を自分の手で整備できるという喜びもあります. また、地元ではないですけど越してきた人が、お子さんが小学校に上がって低学年のときにたまたま創遊会のほうに引き込んで、その子が小学校の課外授業に来たときに、父兄として出るのではなく、創遊会のメンバーでここを整備しているのが私のお父さんだよという格好で出られた. そういった格好で子どもと接することができて非常に良かった、普段見られない子どもの姿が見られて良かったよというお父さんの声を聞いて、それはそれで良かったのかなというふうには思いましたね.

○**山本** ありがとうございます. 多分その人、誰か分かったような気がするのですが、本当にそれってあるなと思っていて、その人、僕に言ってくれたことが一つあって、「会社休まないかんで大変ですね」とストレートに聞いたのですけれど、「こういう機会があるで、逆に有給が使えるで良かった」ということも言ってくれて. そういう、何て言うんですかね、現役世代独特なあれかもしれないですけど、そんな家族とのふれあいの時間みたいなものもできるのかなと思っていますところ. ありがとうございます.

今、こうして岩本川創遊会の話をしてもらいましたが、同じようにふるさとの川づくりを猿投の広沢川というところでやっているのですけれども、ちょっと今日、この猿投のまちづくり協議会の方もいらっしやっているかなと思いますが、河木照雄さん、ちょっとすみません、急な振りであれですけど、今年やった活動であるとか、そういったのをご紹介頂けるとありがたいです.

○**河木** 広沢川で川遊びを今やっているわけでありましてけれど、浚渫工事の最中でございますので、愛護会を来年か再来年ぐらいをめどに設立しようと頑張っているところであります.

ただ、先ほどもお話があったとおり、地域への愛着というのはやっぱり子どもたちに植えつけたいということで、川を使ってやるということは非常に意味がある、効果のあることだと思っていましたので、2年ほど、浚渫してきれいになった川でアユのつかみどりだとか、捕まえたアユをみんなで食べるというのをやったんです. ただ、よそからの魚をとることがあったんですけど、徐々に徐々に川がきれいになってくると、その川で魚を捕まえたりして、だったら川に遊びに行くという機会をつくっていくということにちょっと貢献できたのかなと思ってるわけでありまして.

先ほどもお話があったとおり、川で楽しんでもらえるような、川に行くと楽しみになるようなその仕掛けをどうやっていくのかというのは、今日、岩本川の小野内さんの話にあった、どうやって人を巻き込んでいくのかというのを参考にさせて頂きたい. どうしても子ども会の保護者の親はあまり川に連れていきたくないみたいなことを言うものですから、ちょっとその辺のところを上手に仕掛けしながら、子どもたちに何か地域の愛着というのを持ってもらえるような、広沢川を通じてということ.

また広沢川は猿投山とつながっているところがありま

すので、先日は山本さんやここにおられる近田先輩と広沢川源流を訪ねたりとかということを実践してきました。今度、子どもたちを連れてそういうことを夏休みとかいろいろな時に展開しながら、川に対する思いというのをきちんと持たせるような、そんな活動を続けていきたいなと思っております。今後とも研究所の皆さん方のお力を借りながら頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひ致します。

○山本 すみません、河木さん、ありがとうございます。今、河木さんにお話しして頂いたのですが、本当にちょっと子どもの保護者世代のことは一旦置いて、岩本川は結構小学生とか子どもを中心に活用というか、川に遊びに来てもらっているのですけれど、広沢川でもそういう子ども向けの、親子向けのイベントも行っていきます。そのほか、今年、先ほど言われた「源流を探そう」というのは、結構大人が楽しかったなというふうに思っています。大人だけで行ったんですけどね。ですので、大人、自分自身、坂本さんの話もありましたけれど、自分自身も楽しめるというのは、やっぱりすごく重要なことかなと思っています。

私自身は関わっていないのですが、去年は確か水車でしたかね。広沢川に昔、水車がたくさんあって、その残っているものの勉強会みたいなことも確かされたという話もあって、それもやっぱり話を聞いていると、皆さんがすごい楽しそうにやっているというのが印象的であったものですから、やっぱり自分が楽しむというのもすごく重要だなと思っています。

坂本さん、今ちょっとこんな感じで、ちょっと岩本川と広沢川での事例でちょっと話を聞いていったのですが、何かここ、良いなみたいなことはありますか。

○坂本 先ほど、お父さんというのがお話の中で結構キーワードなかなと思って聞いていました。大阪の芥川というところでは、「お父さんのための魚とり講座」というのをやるというのを聞いています。先ほど八木さんが、おじいちゃんも英雄になれる瞬間があるんだということを言われていたと思いますけど、魚を獲ったことないお父さんに市民団体の人がちょっとレクチャーを先にして、こうやって獲るんだよというのをお父さんが身につけて、かっこいいところを見せるというのは、これは結構大事なんじゃないかなと思います。何かそういうイベントをいろいろな水辺愛護会さんの中で、お父さんのためとか、あるいはお母さんのための〇〇みたいな

がなんかあってもいいのかなと思って。何かそういうのも一つキーワードなかなとちょっと思いました。

○山本 ありがとうございます。小野内さん、お父さんのためってどうですか。

○小野内 まさしく去年ちょっとやろうかなと思って。実は日程の関係、準備の関係でちょっと飛ばしてしまったのですが、毎年探検隊、コロナの時期だとかはちょっとやれていないのですが、岩本川探検隊ということで、ポンツクとかガサガサをやっています。岩本川というのは大変嬉しいことにいろいろな生物というか魚がいたり、実際に子どもたちが入る場所は、どうでしょう、直線で200メートルあるかないかの世界なんですけれど、その中にドジョウが3種類いるだとか、オイカワだとかハヤだとかいろいろな魚がいたり、ヤゴも非常に多種多様で結構います。そういったものを捕まえながら、捕まえる技術もそうですけども、捕まえたものの名前を覚えてもらって子どもに教えてもらいたいなということで、お父さんのためのガサガサ大会などをやろうかなというような計画はあります。けれど、じゃあ実際お父さんたち来てくれるかなという不安もあって、そこら辺が今どうしようかとメンバーと思索しているところです。

○山本 ありがとうございます。ぜひ来年実現したら、できたらいいなと思っています。坂本さんの話では、おじいちゃんも英雄になれるという、お父さん、おじいちゃんですね。一つ思い出したことがあって、水辺愛護会でですけど、あれはどこだったかな、越戸公園の前ですね。当時、確か名前が石倉水辺公園だったかと思うのですが、矢作川の越戸公園の前で、結構昔、毎年、青木小学校のPTAの主催で、夏休みに小学生が川に来るという企画に、矢作川研究所が持っている矢作川学校の講師派遣で対応していました。あるとき、その保護者の方が「いつ来てもきれいですね」みたいなことをおっしゃるんですよね。この人たちは、ここをこうやってくれている人たちのことを知らないんだと思って、その次の年ぐらいに実際に愛護活動をしてくださっている方も来てもらって、できれば子どもたちに教える役もやってくださいというようにお願いをして、やってもらったことをふと思い出しました。そのときは皆さん、「いやいや、そんな教えるなんて」ということをおっしゃるので、別に難しいことはなくて、そのときは釣り餌のつけ

方であるとか、網での魚のとり方みたいな、本当に皆さんが昔やっていたようなことを今の子どもたちは知らなかったりするんで、あんまり難しく考えずに、そういう地域の親子向けのイベントであったりとか、そういったものの講師というか、一おじいちゃん、おばあちゃんとして関わるのというのもいいことなのかなと思っています。

いろいろ川との付き合い方もあるというところで、皆さんそろそろ気付いているかもしれませんが、私、しゃべる進行役ですので、回せよと思うかもしれませんが、ついしゃべっちゃうので、そこはご容赦頂きたいと思っております。

では、少し話題を変えまして、草刈りであるとか、川の石を組み替え、岩本川とか広沢川でやっていますけれど、石を置いて流れをちょっと制御してみようかみたいな、そういった取組をいろいろやっている中で、ちょっと私自身もすごい疑問に思ったことがあるのですけれど、そんなことやっちゃっていいのかなみたいなことを思うことはないですかね。ここまでやっても大丈夫なのかなとか。あんまりないかもしれないのですけれど、実際どこまで川を触っていいか問題みたいなのはあるかなと思っているのですが、ここでちょうど須藤さんに来て頂いています。管理者、市の河川の管理者として、草刈りとか、川の中にある石を組み替えたりとか、堆積した土砂を小学生がスコップで掘るだなんてことをやっちゃっているのですけれど、そういうのって大丈夫なんですかね。

○須藤 川というのは、河川法という法律があります。ちょっと河川法を整理する前に、川というのは、何々川という名前の前に一級だとか二級だとかというのがついているのですけれど、どういったことかということをやちょっとお時間頂いて説明したいと思います。一級河川というのは、県をまたぐような大きな河川に付きます。例えば、この辺でいうと矢作川ですね。長野県を源流として、愛知県を流れて、三河湾に注いでいる。一級河川矢作川に注ぎ込む小さな川、と言っても大きいのですけれども、一級河川なんです。一級河川には一級河川しか注ぎ込まない。例えば、市木川ですとか、加茂川ですとか、安永川、こういったものを一級河川といわれています。一級河川は国土交通省が管理したりだとか、愛知県さんが管理したりだとか、国か県が管理するものになります。

一方で、二級河川というの聞いたことがあると思

ます。豊田でいうと、南のほうにある逢妻男川、女川、こういったものが二級河川になります。これは愛知県の中だけで完結する。上流は愛知県、下流も愛知県。これは二級河川とって愛知県が管理する河川になります。もう一つ、準用河川というのがございます。これは河川法に準拠して管理していきましょうという、豊田市が管理する川になるのですけれど、一級河川、二級河川、準用河川、これらは河川法に基づいて管理をしなければいけません。ですので、法律的なことを言うと、その土地の、この川の中の形状を変えてしまう、つまりスコップで掘ったりとか、石を組み替えちゃって流れをちょっと制御しようとか、そういったことをしようとするときは河川法上の許可が要りますというようには条文には書いてあるのです。一方で、その治水上、影響ないということで管理者がみなしたときにはこの限りではないというような書き方もしてありますので、どこまでやっいいか問題というのはいつもつきまとうのですけれど、その都度、管理者に聞いてくださいというのが答えなのかなというようには思います。ですので、子どもがスコップで掘る程度なら、何ら治水上問題はないので、いいのかなというように思います。

○山本 ありがとうございます。安心しました。結構心配していたのですけれど、とりあえず良かったです。実際にそういう間合わせというか、川の中に生えている木を切りたいとか、そういった問い合わせは河川課にも入ったりするのですか。

○須藤 結構、夏休みのときになると、「子どもが工作で使いたいから、矢作川でちょっと竹を伐っていいですか」とか、そういった話はちょくちょく聞きます。場所場所で矢作川の管理が国だったり県だったりするものですから、「管理者さんに聞いてください」というようにはお答えするのですけれど、治水上、影響範囲、治水上問題あるとは思いませんので、その管理者さんも「それぐらいならいいんじゃないですか」というようにお答えになっていると思います。

○山本 分かりました。ありがとうございます。皆さんも、ちょっとこれどうかなと思ったら、一度河川管理者に相談してみるというのがまず間違いないということだなということです。ちょっとこれで、私ももうちょっと落ち着いて、皆さん、地域の皆さんと話すときに自信を持ってしゃべっていけるかなと思っています。

ちなみに、こういった何か法的な縛りっていうんですかね、坂本さんの話の中の夢プランなんかでは河川管理者への提言みたいなのところもあるのですが、豊田の場合、僕自身は川に対する元気な市民の方が多くいらっしゃると思っているのですが、ほかの地域でそういう提案を管理者にしたりとかというときの、むしろ管理者側の受け止めみたいなのを何か感じるところはありますか。

○坂本 今日先ほど紹介した木曾川の話の中で、木曾川でこんな夢をちょっと考えてみましたというのを提案したときに、国土交通省の人が聞きに来てくれました。国土交通省の人にこれどうですかって聞いたら、農業、川の中で農地を耕すとか以外は何でもできます。その実現の一応一定のルールとかそういうのはあるにしても、あらかたのことはできますよというように、結構オープンな感じで受けてくれた印象がありました。当時そういう話もしていたので、まず何かやってみたいことから、最初、ツリーハウス作ろうとかそういう話もありましたけれど、例えば年間の中で、この時期はちょっと難しい、この時期はちょっと外しましょうとか、そういう裏技というか、できる方法というのは、ちょっと考えると、ひねり出すときっとできる方法はあるので、何かそういう発想でこれをやってみたいんだけどという感じで振ると、意外と受け止めてくれる、何かできないかなというように知恵を一緒に考えてくれるということもあるかなと思いました。

○山本 ありがとうございます。ちょっと急に話は変わっちゃうのですが、それぞれやっぱり連携、市民連携ということで進めていっている中で、いい話はやっぱりよく聞くと思うのですよね。逆にちょっとこれ失敗だったとか、そういう話を聞けるといいんじゃないのかなと思うところもあって、その辺りをまた改めて小野内さんに聞いてみたいと思うのですが、何かこれ失敗だったとか、ありませんでもいいのですが、何かあれば教えてほしいです。

○小野内 正直なところ、何が失敗で、何が成功でというのがいまよく分かっていないので、本当に目の前のことを粛々と片付けていくみたいなのところもあります。またこういうふうになったら良いなのというのは、先ほどの川の流れじゃないのですが、どうしても川の流れは自然の流れですので、自分たちが、変な話、草刈り

がしやすいように川が真ん中を流れてくれれば僕たちにとってみたら嬉しいんですけど、どうしても偏ってしまったり歩けないところもたまには作ってくれるので、そうしたときに何とか真ん中にいてくれんかなと思って、ちょっと先ほどの話じゃないけど砂をいじらせてもらいました。けれど、結局自然に負けて、また元に戻って、歩けないところがちょこっとできてしまったというところがありまして、やっぱり自然は言うことを聞いてくれるときとくれないときがあるんだなということが正直なところあるので、失敗は見なかったことにしております。

○山本 失敗は見なかったこと、なかなか良い事例、前向きになれる感じかなと思います。坂本さん、いろいろな団体とか活動を見られている中で、何これ、良くなかったなって悪口になっちゃうとあれなんですけれど、そういう事例とかって聞いたことがありますかね。

○坂本 やっぱりいろいろな団体さんが活動している中で、どうしても1人の方が中心になってしまってなかなか、というところはありますね。やっぱり何人かでやっているところは非常に楽しそうで、何ですかね、仲間集めとかそういうのって非常に大事だなと思います。映画で昔あった「七人の侍」で、あれは映画の中で非常に時間をかけて7人を集めていくというような、そういう構成になっているのですが、何か新しいことをするときにも、やっぱり仲間がいるというのは、例えば土木的なことが得意な人がいるとか、食事を一緒に作って食べるとか、そういうメンバーがいるところは非常に楽しそうだなということで、失敗というよりは、そうですね、仲間がたくさん、顔が見える関係があるかどうかというのも一つ大事なのかなと思いました。

○山本 そうですね。ちょっと話に熱中していたところで少しずつ時間が迫ってきているというところがございます。なかなか失敗例というのは話すのも難しいところもあるかなと思うのですが、何かに生かしていけると良いかなと思いますし、1人で動くというのはよくあるかなと思っています。すごくキーマンみたいな方がいらっしゃる、最初バーンと進むのですが、その後が続かない。その続かないことが悪いとは言わないのですが、もし続けるということを考えたときには、いろいろたくさん仲間がいたほうが良いかなというのはすごくあるかなと思いますし、そういうときにどうやって作るかという話にはなると思うのですが、やっぱり

こう楽しいことを共有できるようなことがあるといいのかななんて思っていたりします。

では、少しずつ終わりが近づいてきてしまっているという中で、せっかく今日は須藤課長にも来て頂いていますというところで、全体から意見を受けるとちょっとえらいものですから、小野内さんのほうから、例えば何か行政とか、研究所のほうに期待したいこととか、お願いしたいなということがあればお伺いしたいです。

○小野内 昔、吉橋さんからインタビューをちょっと受けたことがあったときに、そのときは創遊会を立ち上げた2、3年後だったかな、そこら辺のレベルのときでしたけれど、僕たち創遊会が地元のメンバーなので変わりようがないですよと言いました。けれど、協力して頂いている矢作川研究所の皆さんとか行政の皆さんは、何年後には替わっていくよねという話で、実際山本さんも最初立ち上げの頃はみえたけども、途中2年ぐらちょっと勉強しに行かれたので、そういったときにどうやってその連携を取っていくかということが非常に難しいかなというように思いました。

また、今、河川の関係で、先ほど坂本先生のほうからお話があったみたいに、行政の在り方もちょっとずつ変わってきていますよねという話で、治水をメインに見るのか、最近ちょっと叫ばれている自然再生をメインに見るのか、そこら辺の立場の違いによって、行政に委託するところも変わってくるような気がするんですよ。

先ほどの堤防だとかのところでは道路をやってくると、道路の関係になるのかな。土木建築にもなってくるし、それから河川に対しては河川課になってくるし、公園だとかなんかになると環境関係になってくるしというように、行政のほうもいろんな縦割りというか、その中の連携というのが僕たちはちょっとよく分かっていないのですけれど、そこら辺の連携が今よりももうちょっと柔軟性を持っていけば、もっとスピードを持った、先ほどの坂本先生の夢プランではないですけど、そういったところももうちょっと実現性が見出せていけるのかなと勝手な想像はしているのですけれど。

とにかく、最近では治水もしかり、自然再生もしかり、それから環境もしかりというふうで、いろいろなものが重複していく時代にはなっていくので、せっかく須藤さんが見えているので、河川課とか行政のほうとしてはそんなような、曖昧と言ったらおかしいけども境目がある程度取っ払った、そんなような柔軟な課とかというのはできたりなんかしますか。

○須藤 やっぱ組織なものですから人事異動というのはつきもので、何年かに一回替わるというのは避けようのない問題なんです。だけど、できることと言えば、私たちがその人事異動を考えるときに、例えば研究所の山本研究員なんかは、研究所にいて、一度その環境部局に異動しているんですね。また、その環境部でいろいろな環境のことを知った上でまた研究所に戻ってくるというような人事異動が今できておるわけです。ですので、例えば私、課長とか部長の立場として、縦割り行政の弊害というのが当然あると思いますので、それをその立場、立場で何ができるか、どんなことができるかという、小野内さんがおっしゃるようにもうスパッと縦じゃなくて、重なるものが当然出てくるんですね。もう出てきている。今後ますますそれが出てくる。ですので、研究所のことしか知らないよ、河川課の業務しか知らないよということでは職員も通用しなくて、いろいろな経験をしなきゃいけないということ踏まえて人事異動というのはいかなければいけないかなと思っておるところです。

○山本 ありがとうございます。思った以上に答えて頂けてちょっとよかったなと思います。自分の話が出るとちょっと思わなかったの。確かにそうですね。僕自身、異動しないだろうなと思って、どっぷり岩本川に入っていた。広沢川もそうなんですけど、どっぷり入っていったらポンと替わっちゃって、しまったなというのはすごく感じました。ただ、戻ってきたときに、また皆さん変わらぬ顔ぶれで、「よう戻ってきたね」と言って頂き、待っていて頂けたというのはすごく嬉しかったなと思います。

本当に今言っていた市民連携と言ったときに、確かにそうなんですよね。行政は人が替わっていくというのは避けられない問題という中で、これは大きな課題だな、課題というか難しい問題だなというのはすごく思いました。確かにそうですね。坂本さん、そういった面では何か情報みたいなものはないですか。

○坂本 ある人が、行政との付き合いのことを、川づくりは際づくりだということを言っていました。いいときと悪いときがやっぱり人事異動の中であって、当然人間同士なので相性が合ったり合わなかったりとか、ちょっとへこんだりとか、ちょっと張り出したりというのもある。それは川の際、水際を固めると一律の川になってしまっ、良くないのと同じように、ちょっと張り出して

みたり、ちょっとへこんだ時期があったりというような、ある意味せめぎ合いの中でお互いやり取りをして、いろいろなものを考えていくという意味で、お互いの際を意識しながらやっていくというのも何か一つ大事なのかなと思ったりもしました。ちょっとそんな話を思い出しました。

○山本 ありがとうございます。すごく最後良い言葉で言って頂けたかな。確かにそうですね。川づくりは際づくり、水際の際ですね。すごくそれ、良いなと思いました。川みたいに、何て言うんですかね、境目を曖昧にするというか、確かに、それ、ちょっと、自分も肝に銘じるのかな、意識していきたいなと思いました。

ありがとうございました。本当はたくさんいろいろな種類の話を出して、お話を深掘りしていけたらなんて思いもあったのですが、思ったより時間が経つのが早かったというところで、最後、坂本さんに川づくりは際づくりという考え方もあると良いお話も聞きましたので、こういったところで今回のこのディスカッションをこの辺りで閉めていきたいと思っています。

本当に、先ほど私の報告でも申し上げたように、川に関わってくださる市民の皆さんがいないとやっていけないというのはすごく感じています。自分たちだけではできないなというのを感じています。それをできるだけ無理のない範囲で長く続けていけたら、それによって、良い川の環境が続いていったらいいというのが、私、すごく思っているところです。

そういった面で、これで研究所は今年30年を迎えるという中ではあるのですが、また引き続き皆さんにご支援頂いたり、あとは、話が長いよとか、もっと話を

回せよとご指導頂きながら、これからもまた改めて川づくりに取り組んでいきたいなというように思っておりますので、引き続きの皆様のご理解、ご支援を勝手ながらお願いさせて頂きまして、今日のこのディスカッションを閉めさせて頂きたいと思います。拙い進行、しゃべりすぎる進行で大変お聞き苦しいところもあったかと思いますが、本日はどうもありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。パネリストの皆様、大変熱心にご議論頂きましてありがとうございました。パネリストの方々に退席頂きたいと思います。会場の皆様、もう一度、盛大な拍手をお願い致します。

ありがとうございました。それでは最後に、豊田市河川課課長、須藤友章より閉会の御挨拶を申し上げます。

○須藤 本日はお忙しい中、シンポジウムに足を運んで頂きましてありがとうございます。矢作川研究所が様々なことに取り組んでおります。やっぱりそれは市民の皆様の生活に還元できるような取組を進めていきたいと今後も思いますので、皆様の忌憚のないご意見だとか、ご指導を今後もよろしくお願ひしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

○司会 以上をもちまして豊田市矢作川研究所シンポジウムを終了致します。最後のお願いになりますけれど、配布資料のほうにアンケートがありますので、今後の参考になりますように皆さんのご意見を頂けたらと思います。お手数ですがご回答頂いて、回収ボックスのほうにご意見を寄せてください。本日はご来場誠にありがとうございました。